



縦
綴
度
日
疑
叢

初編

巻



佩詩彙句題叢系總目錄

冬之上

十月朔	初五日二	時雨日	小春
小六日三	初十日	初五日	初五日
玄猪四	達日忌	芭蕉忌	初七日
清氣降	十日	夾律六	初九日
非道	初十日	菜口切	初十日
時雨九	又時日十三	初十日	川書時雨十五
松風時日	去日	初日	初日
初日	落葉十七	折落葉十八	限查落葉
教日	本葉十九	風	本葉廿三

題叢目錄

色八之十

昨走金

昨走月金

事弱

臘八

仙名金 全六

色

色夜 全七

色夜

色八 全八

色肉

色姬雞

色名仙

色重 全九

色造

角力 全九

色晒

色紅

色水

岡見

色日 全十

色粉 全十一

色乳

色構 全十二

小忘寒

色粉 全十二

色月 全十三

色月 全七

櫛 全八

炭竈 全九

炭

炭賣 全一

田炒糞

火泮

火桶

巨魁 全二

巨魁榜

埋火 全三

懷爐

湯盛

金 全三

紙衣 全五

蒲團 全六

絛子

絛帽子

頭巾 全五

是袋

色雲

色夜 全四

色心

色中

色系

色海

色川 全九

色田

札納 全一

衣死

煤掃

餅搥 全五

死餅

餅花

年貢

年木葱

書出

拭乞 全三

年分

年紙

死松

松刺

繡刺

色季候

年内立 全四

年市

羽子板賣 全五

總長賣

門松賣

色并賣

齒朶

門松立

古曆

曆賣

網味嘆

年忘

年守 全六

年用忘

題書

まをて訪の籠る小をわ
人呼て小ををる満葉小
ひきの心の更くも小をわ
雪の抜くりもり小をわ
よまう人の意でさる小をわ
様姿の小を機通にむらり
大名のともをさる小をわ
芦の最のくもをわ小をわ
小産取の桶打てる小をわ
よくはれは養をうく小をわ
百姓のまをする小をわ

魚
花
了
柳
水
米
金
道
金
魯
覺

酒吞に臨へあはれいかの小を
ひまにひすれをさる小をわ
梨るれ本れ柄にまの千ん小をわ
おのひをて蘇淡とつむ小をわ
息方こ良や小をの豆まは
是るにれををん小をわ
炭拂のゆくとく足ゆ小をわ
己の柄のね白ふ小をわ
己を大後にりをさる小をわ
枕井を依んとす小をわ
中海嵐守海足に物小をわ

長
後
右
柄
云
芝
柑
良
柳
左
小

小六

題叢冬

神 送

糸板たひ糸送神も世休たり

糸打りり糸たきりり画す

糸送服に足ゆるその杉の丸

糸 留

糸の留さ糸留のふり来て

意のみ糸の世留ると自らこ

て。月のお心の糸も糸守り

さすさすす糸の世の糸も糸

初 毛

初の中下さつ子糸糸糸糸

初の中扱に入てやおりはら

初の中とく糸糸糸糸糸糸

初の中白すまの糸糸糸糸

一糸

二糸

三糸

四糸

五糸

六糸

七糸

八糸

九糸

十糸

十一糸

糸

糸

糸

糸

糸

糸

糸

糸

糸

糸

糸

題叢冬

芭蕉忌

連平忌やちりきしらぬ一
連平忌や母夜叉の星と
連平忌や菊天の入汗の中
ちりきしらぬ忌の元
けりきしらぬ忌の元
風は古人の夢の
てをよみよみ城も日本の國の敷
ちりきしらぬ忌の元
てをよみよみ城も日本の國の敷
ちりきしらぬ忌の元

只一
乙二
竹平
種元
今
鳥破
晩香
周更
存亞
之坊

ちりきしらぬ忌の元
ちりきしらぬ忌の元
ちりきしらぬ忌の元
ちりきしらぬ忌の元
ちりきしらぬ忌の元
ちりきしらぬ忌の元
ちりきしらぬ忌の元
ちりきしらぬ忌の元
ちりきしらぬ忌の元
ちりきしらぬ忌の元

一子
道老
身臨
日人
未月
美里
復物
百明
華お
竹平

懸鐘冬

藪子やすのの色の葉をま
櫛素灰も十ののりか
鳴呼世日様とてあつたか
すふれれ十の汁の平板子
日も足ぬ十の葉大葉中不
法葉と通るや十の板か
南刺し大板葉は十の板か
木阿板も大のけりや十の板か
まろの葉も日十の板か
竹あや十の葉大肉湯因士
素長やもつれ立てり十の板か

白研
在亞
朱員
道差
末迪
自化
今
一葉
渡物
且雙

恵比須講

瓜皮うら揚りひかり夷講
船のきて一りまろ平夷こ
ろ板む瓜の長さ夷講
夷ここのおきいそん寸
糸糸葉へ低滑もち夷こ
後ろ板へ是し牡子夷こ
葉相も葉ののれお板り
一りの葉も掃ておむ瓜
糸通るや片ややの葉
板子ぬそ友ひりる心わ
板子やや中へ葉の葉酒

鬼
柳儿
大板
道差
尻平
如丸
葉南
椀差
俵々
椀差
在亞

願叢冬

とうまの心耕されや初行白
 初行白と茶粥の後にふは之
 初行白とのみ行も終る
 常に茶をふれりや初行白
 けりよとるまもてん初行白
 たのうたる者のまも初行白
 ふらうらひるり終て初行白
 一人の本集すし初行白
 不露ハあるもハ初行白
 心里ハまの心人初行白
 終るは終るも初行白

兼飛
 見直
 多為全
 全
 甘苦
 苦三
 一子
 乙二
 冥く
 凡所
 全

茶に遠くおぬ初行白
 長流をぬまも初行白
 井井に心も初行白
 おりく手まに入りや初行白
 心まの祖又ハ下戸之初行白
 杖つらむれ初行白
 ちうーいせの初行白
 貴や心行も初行白
 初行白の初行白
 初行白の初行白
 初行白の初行白

茶地
 凡此
 岳嶺
 茶園
 塊菴
 学堂
 号亮
 一葉
 寛松
 座人
 幽備

題叢冬

大津路の鬼も笠巻を初め
翌の坂のまりまゝして初め
江の上に心を平初め
初めそれおまをせぬ守り
初めそれ素菜の籠か
流初めそれ守初め
素湯帯初めそれ友初め
初めそれおまをせぬ守り
二十又のつりゆき人初め
丁の素巻を初め
勝つおまをせぬ守り

年池
井眉
武陵
又美
志山
雲帯
初め
素既
か
了園
松江

大粒を素巻の平初め
初めそれおまをせぬ守り
素巻のなを素巻たり初め
おまをせぬ守り初め
小を素巻もそれたり初め
初めそれおまをせぬ守り
松に心を平初め
雪の平に素巻初め
まゝそれおまをせぬ守り
海のまを平初め
初めそれおまをせぬ守り

尾原
透人
若松
美尾
松江
伊勢
無半
素巻
一境
寺市
院
左
几臺

題叢冬

一々平あまら春のりりり
 つれ重なりや可るの歸又兼
 大その旅いふまを可るりり
 志るやふれいたる葉の上
 船もや志るくはのまれま
 こくと暮のまのよ可るか
 凡そやいふまを可るか
 さに非にまなくとも可るか
 まを可るくや可るのまは
 於作すまや可るのまは
 越ふに可るのまのまは

白旗
 保吉
 感喜
 全
 勝石
 斗入
 大江丸
 士助
 全
 全
 柳庄

可るまなくとも可るか
 甫うい可る可る小田の丁
 志るれり先へまなくとも
 里花左太にまなくとも可るか
 一それまぬまなくとも可るか
 志るれりと商人すまなくとも
 一それまぬまなくとも可るか
 いそり一々のまなくとも可るか
 務のぬこまなくとも可るか
 ひら田の路や可るの路より
 一それまぬまなくとも可るか

張六
 存亞
 屏珠
 漸江
 希云
 長春
 本儀
 標中
 全
 榮水
 全

題叢冬

去子のけしとあれはなるより
 糸の糸をさききりてなるより
 皮着のききりやけなるより
 皮さきりて人取りやけなるより
 櫛のまもあれはさしとれは
 さきりてあはれはさきりて
 隣尺の種あきりてりなるより
 一とれすそ人のさきりてり
 去る市旅にりたる葉は
 葉下の畔のさきりてりなるより
 さきりてりたるはれはさきりてりなるより

全 朱英
 全 有山
 全 万部全
 全 鬼孫
 一 子
 全
 全 葉柳
 全 透彦
 全

己里に葉はのさきりてりなるより
 さきりてりたるの先のさきりてりなるより
 さきりてりたるの身のさきりてりなるより
 前とれはあはれはさきりてりなるより
 さきりてりたる松原に里村なるより
 葉の欠に揚売越るなるより
 主波の果さきりたるなるより
 己の心あはれはさきりてりなるより
 さきりてりたるの葉はさきりてりなるより
 己里や葉のさきりたるなるより
 葉はさきりたるやけなるより

全 岳嶺
 全 尺丈
 全 長島
 全 塊鼻
 全 常盤
 全 津島
 全 赤松
 全 葉柳
 全 葉松
 全 葉原

題叢冬

あれくゝ庭葉自ふ竹百小
芳の鼠も竹百のりぬみそ
しつゝや肉養をその中欲他
みれを費て竹百のふりり手
いふものすゝくすゝと素る竹百
兔角しつ竹百子と素れり
しつゝや肩も素れぬ小凡を
鏡とふ竹百のちをさへ竹百り
素れ人を素れにさる竹百か
猿の人も素れて竹百
上張の鼠を素るしつ竹百か

壺 仙
阿 量
一 蕙
米 珠
養 珠
六 興
与 静
木 子
ト 鏡
不 養
一 瓶

松より竹百のやまそ海苗
るまのれそ竹百り上の鼠
葉素の先にさる竹百か
塗たての寛養たる竹百か
竹百より大ぶる素れ松の自
ちのさしと素れ竹百竹百り
竹百のそとと竹百のそとと竹百りぬ
素るしつゝ竹百のそとと竹百り
ぬる竹百のふ竹百の花 ちと人
志と竹百の耳に素る竹百の素
竹百のそとと竹百のそとと竹百りぬ

李 尺
百 二
白 井
丹 氣
還 古
英 尺
平 城
柱 心
作 良
秀 教
二 園

題素冬

初

寄

初寄中田中の枕のなほ

柳花

初寄の庭をたぐりや竹の月

寄本

初寄中流のこゝろ岩の上

深

初寄中峰を登りて此峰第

保吉

初寄のむらり引込る庭か

感喜

初寄やこれ屋と云にあり合を

花仙

初寄や流れて礼をす枕つ

斗入

初寄のささきしとや雪のき

自樂

初寄や川の舟の子のそや二才

無誤

初寄や庭のきりけの根白子

恒丸

初寄や人の長ゆる根木笠

士初

初寄や雪のきのの鳴る

樗牛

初寄や原に出たる梅の花

朱英

初寄に足たきと兼の我りし

翁翁

初寄のつりやする垣根子

一子

押振り初寄を来りぬさし子

真々

初寄や松の峰のり入りぬ

岳嶽

初寄のきりやまに候きりし

道彦

初寄や厨の登をいさりし

志郷

初寄のこゝろありたる人の上

少女

初寄や古びたる壁の穴

一葉

初寄や人の庭をいさりし

空花

題叢冬

初雪やうき雪をこころに心
 初雪や狐も子けをこころに
 初雪や子けのこころに
 初雪や松の枝
 初雪や松の枝
 初雪や松の枝
 初雪や松の枝
 初雪や松の枝
 初雪や松の枝
 初雪や松の枝
 初雪や松の枝

秋去
 一蕙
 百考
 流海
 岸西
 小尾
 五光
 三年
 馬明
 岳輪
 陳露

初 氷

初氷やうき氷をこころに心
 初氷や狐も子けをこころに
 初氷や子けのこころに
 初氷や松の枝
 初氷や松の枝
 初氷や松の枝
 初氷や松の枝
 初氷や松の枝
 初氷や松の枝
 初氷や松の枝

初氷
 一蕙
 百考
 流海
 岸西
 小尾
 五光
 三年
 馬明
 岳輪
 陳露

題兼冬

屏

花

心菜花の才花もさう咲けり
 喜花の芽も見て咲やゆふ
 夢のいと寝て見さうりり
 片枝のさうやうにさうりり
 名のれれ木もさうはるる
 ゆかいさう老木の葉も
 ゆ花咲けりもさう咲けり
 さう花もさう咲けり
 ゆ花咲けり二りの月のあ
 うゆのさうりりもさうり
 ゆさう花もさうりり

後白
 女子代
 伊達
 藤左
 園子
 白梅
 今
 梅人
 恒丸
 雲流
 喜川

市中の風もさうりり
 風の吹まもさうりり
 外の里もさうりり
 風にまけりもさうりり
 枚もさう風もさうりり
 風や海もさうりり
 風や月もさうりり
 風に吹まもさうりり
 本もさう風もさうりり
 風やまもさうりり

鐘歌
 傾
 尾
 尾
 尾
 尾
 尾
 尾
 尾
 尾
 尾

題叢冬

杭 乞
芦 芒

ゆきよれよそくしんを杭尾か
蕨よりも尾かやまを杭尾か
ゆきよれよそくしんを杭尾か
遠つたるもやまを杭尾か
これよれよそくしんを杭尾か
遠つたるもやまを杭尾か
松にそよて死るれも毛や毛芒
杭尾のりんよそくしんを杭尾か
まて天に川辺の芦の杭尾か
いちよれやう杭尾か
杭尾やゆきよれよそくしんを杭尾か

玉光
善海
六介
素共
因實
送彦
周又
曉素
白旗
恒凡

ゆきよれよそくしんを杭尾か
ゆきよれよそくしんを杭尾か
引てゆきよれよそくしんを杭尾か
杭尾に廣るるもやまの翅り
杭尾の毛にゆきよれよそくしんを杭尾か
杭尾の毛にゆきよれよそくしんを杭尾か
杭尾の毛にゆきよれよそくしんを杭尾か
杭尾の毛にゆきよれよそくしんを杭尾か
杭尾の毛にゆきよれよそくしんを杭尾か
杭尾の毛にゆきよれよそくしんを杭尾か
杭尾の毛にゆきよれよそくしんを杭尾か

士郎
木僊
樗牛
祥糸
乃二
岳輪
道彦
公
護物
麻中

顯叢冬

樹葉の葉に葉の葉の葉

葉輝

中をゆくや人の影をて杖

馬頂

葉をてあふれて人のさうり

葉丸

杖のての葉の葉に合

一嶺

子や杖の葉の葉の葉

白枝

子や杖の葉の葉の葉

木六

子や杖の葉の葉の葉

葉松

子や杖の葉の葉の葉

井土

子や杖の葉の葉の葉

葉足

子や杖の葉の葉の葉

葉葉

子や杖の葉の葉の葉

葉葉

子や杖の葉の葉の葉

葉葉

子や杖の葉の葉の葉

葉葉

子や杖の葉の葉の葉

葉葉

子や杖の葉の葉の葉

葉葉

子や杖の葉の葉の葉

葉葉

子や杖の葉の葉の葉

葉葉

子や杖の葉の葉の葉

葉葉

子や杖の葉の葉の葉

葉葉

子や杖の葉の葉の葉

葉葉

子や杖の葉の葉の葉

葉葉

子や杖の葉の葉の葉

葉葉

題最冬

その甲を湯に飛鳥の木の
 支鬘る枝の木の氣か
 松のや中辺にむすよるの
 むつすうや枝のなつ
 川冬の洞のなつ枝の
 石松の古歌詞の木の
 木の枝の歌の是のなつ
 一里のなつ枝のなつ
 洲のなつ枝のなつ
 つのなつ枝のなつ
 酒のなつ枝のなつ

保吉
 戸洗
 士為
 公
 橋
 栄光
 成良
 半心
 万勢
 祥来
 菊三

枝のなつ枝のなつ
 能のなつ枝のなつ
 川のなつ枝のなつ
 夕嵐のなつ枝のなつ
 傘花のなつ枝のなつ
 名もなつ枝のなつ
 牛乳のなつ枝のなつ
 鳴のなつ枝のなつ
 草のなつ枝のなつ
 麦餅のなつ枝のなつ
 白のなつ枝のなつ

席枝
 一子
 冥
 尺文
 月心
 送光
 境
 常
 電
 一
 平角

題筆取冬

杉
花

にやうらうらの香くる松のさ
りのとらに嫁入の通る松をわ
の松も子もかゝ松のわ
日籠もよりや松ををるより
赤い実のりころる松のわ
親子して直交つり松のわ
思半の落葉なる松をわ
侍もるささるる松のわ
幾士の故にたき守松のわ
松枝ハ松の、葉の夕日か

寛松
三原人
松老
湖中
大足
又角
井刃
地蔵
林山
乙二

風れくるとあそびのさ
風にささるる夕
風れやむ時月のま
風や口もよるに子の芽
風の止遠見より松の風
風れ人もま本にぬるもの如
風や仲の路のまのーらん
風やまもそりて人をさく
風や心へ窓あけ山の角
風と余はにさうたる葉湯か
風やまのまて蜂のまうり

長
六亀
甲斐
兼光
右秀
成貞
止る
一羽堂
松英
子共
月化

題叢冬

風れそりや雪の影のき
風や湖岸とちまうまのまう
風や又り元名の庭の松
風や苑もも耳のまうまう
風れづしを漕ゆく小舟か
まうくを風れ葉房か
風や戸のぬれハ葉についで今
りまうた風やに磯の影
海日くちそ風ハ松の葉
風や麻に訓たる松の梢
風れるはありぬの葉まう

志郷
岳嶺
等老
舟旅
一葉
寒松
空境
松石
漫々
蟹也

そのハれ猿や一葉一花
尺の序んぬんまうまうか
ゆかまうまうまうまう
ちる時ちまやすく嶺一葉か
葉の赤もまうまうまう
大くハ赤まうまうまう
軌奏の控てぬまうまうか
けさ喰ハ松のむらゆか
赤まの眠るまうまう
まうくまうまうまう
まうまうまうまう

猿六
成良
午心
五劫星
去葉
平角
尾金
等老
三唐人
寛松
勢剛

題叢冬

業平も老にたるかろくか
 陽を人あはれけくは折り
 陽を正も人あはれけくは
 月出されて把るりおや陽を
 月出されて花の蘇直もあはれけく
 くる町橋子のふれて 陽を
 心人の事あはれけくは
 業平の日記ありりりりりり
 陽を人あはれけくは折り
 陽を正も人あはれけくは
 陽を正も人あはれけくは
 陽を正も人あはれけくは

鶯 雪
 方明
 秋長
 一蕙
 吳老
 三化
 岱老
 吾友
 素孝
 兼お
 貞佐

枇杷花

枇杷花はさくさくは
 清りりりりりりりりりり
 落葉もももももももももも
 ちる年よの力もももももももも
 春てあてもれれれれれれれれ
 秋かれて日のさげりりりりり
 眼のさくさくは田を把るりりり
 きのいそぬ人もももももももも
 傾城の古のさくさくは
 うすくさくは花のさくさくは
 八も花 雷の野のさくさくは

白権
 一子
 万和
 孫雪
 一柳
 孔榮
 純好
 温古
 兼お
 古柳
 去る
 百里

題叢冬

冬牡丹

白の露の度来飲くやつて小

南陽

花咲て小酒流るるや花て小

唐人

美まきるひにありりりり牡丹

唐古

毒おく葉のあり戸や牡丹

唐古

ありりげん様やまきりて牡丹

大和子代

おんくえん切人よんくくらるぬ

橘也

おんくえんくくくくくくくく

表成

長まきやんくくくくくくくく

了尔

まきまきくくくくくくくく

祥木

沙令もつりりりりりりりり

日化

茶花

冬牡丹匠上る際の花小

並麦

冬牡丹人よんくくくくくく

柳麿

葉の花や片の美まき牡丹

葉木

葉花花にたつん年の花舞葉

白梅

丸くくく葉の本の花の咲にり

岱吉

葉の花にやの美まきくくく

士仍

葉花花のむくくくくくくく

今

葉花花に美まきくくくくく

詰云

葉花花とくくくくくくく

檜也

葉花花の美まきくくくく

大身

花くくくくくくくくくく

送老

題叢冬

麦

蔚

葉大花にちれて小々の朝日わ
葉の帯の下に葉とすつ小子わ
露の朝のそらに朝や葉木咲
麦まげと作ゆりりゆ物先

伊勢

尺共
去地
金葉
右存

麦蔚てつ屋とろる村家か

希言

麦新く星と小ひとすれり

存臣

麦新くその夜程の靴うつ

乙二

田に麦とすく國へゆりり馬

卓池

若葉は月には麦さく香か

芝心

冬

楓

葉大花と葉持れ葉とたのり

尺共

冬

楓

葉の楓凍て死なす葉もさ

尺共

折れにうすくすめその楓

尺共

いろれく葉あてそのそく

葉通

冬

葉の楓にいろ葉のそりん

葉通

冬

楓

死と知て葉うすくや葉のゆし

葉通

冬

世にうれえつめくや葉のゆし

葉通

世にうれえつめくや葉のゆし

葉通

世にうれえつめくや葉のゆし

葉通

世の中の子にあく人おのりち

葉通

世の中の子にあく人おのりち

葉通

世の中の子にあく人おのりち

葉通

世の中の子にあく人おのりち

葉通

願最冬

朽葉のてりるこきとあはるち 道彦

うそりた仕やもろいれあるち 八

月ひつらさきも光をあはるち 古卯

着た代の無きしらすやあはるち 漫

園のあひ女共あはるち 文石

松のけしきもあはるち 拵巳

くそあはる人の目あはるち 花叔

おくさきもあはるち 子月

世の中へうらと足あはるち 子容

大穀のふらうらとあはるち 半圓

とれねのあはるちあはるち 三若

川と平れとのりもあはるち 上野園

あつたれと枝にまよふち 曲部

粟やたりのそく魚の乳 乙二

あつたれし川やあはるち 三井人

葉はや万配りたあはるち 羨文

あつたれの目尺でたつちあはるち 加賀

教あはるちあはるちあはるち 婦子

よこひふれりあはるちあはるち 凡律

よこひふれれ袂信あはるち 彦太

よこひふれちあはるちあはるち 二若

狐火と道の繁やあはるち 意里

題叢冬

子

子

ありくに旭ひよかす子をわ

柳元

おきる宿やちりた横ありよ

葎市

凡そのおすうの自の子をわ

会

立てりあへそれ片と乳をわ

女子代

村にけりて自らを村子を

葎左

暖にちれてりやむら子を

曉香

心よりてや二流に鳴子を

会

ぬ第一のよいと怒り子を

白旋

立てちちみみてちち月の子を

鳥礫

やとくみの打にゆる子を

几董

誰かこれ死果つてこ子を

保若

梵の海へ出てりちり

成喜

鳴るん子をや小敷の糸籠

不暇

まうけたるん子を平磯子を

会

さあこれあさをあこれ子を

跨石

ぬにきて松に鳴入子を

恒凡

物子を白の隈よりと居る

会

子を鳴るわが青園と歌にり

謀道

溜の底ふたにきても子を

洲江

中海嵐干地神のそとを鳴得

士為

折ふら管をすつてを鳴うれ

会

歌子をけりてよと長もたか子

携坐

題叢冬

吹れ来てて隣子に母の子をわ

瓜

日の子や葉のうらよりた友子を

長翠

入目にこれ鳴する子なるわ

長翠

子を鳴むや耳に入親の鳴

道橋

見高し 芒を足れいま子を

井六

鳴子をるうもき一羽を刺し

新路

節操子流にまれば又子を

葉花

松原やるに別れてうらちこ

葉花

鶴う鳴てまこぬちこりわ

瓜

瓢箪のすけそまをふお女徳

瓜

川子をる牛の喰まのちりけり

瓜

流の子をる母の子をるとおれり

瓜

又子をる鳴て心魂のそりわ

瓜

ねのやうにねりまめりね又子を

瓜

むつりや子をる母の三折歌

一子

人にかの子やういふをこ子を鳴

平角

そ二月折角あまへ流 子をる

乙二

子をるいおの木の葉のうらつこ

道彦

鶴鶴も二三度はま子をるわ

瓜

鳴子をるおまふまの風をるし

瓜

入ちるん鳴くん海と海をる

瓜

海と海の子をる鳴はと着ある

瓜

題義冬

波に入月見てをれハ鳴りたり
小女子を驚かすやうにわたり
腕ハ海うへ平いり鳴りたり
きしよハゆるき子をたおれたり
暖や同に飛込てくるたり
あつらひそくくつて鳴りたり
おろ子もたつやあつらひの尻
氣屋との流して来たてあつらひ
あつらひにあつらひあつらひ
あつらひの廣うるあつらひ
あつらひもあつらひあつらひ
あつらひもあつらひあつらひ

茶乳
瓜坊
境首
尺艾
志葉
月化
電機
梅園
学舎
日人
音人

たいさう風海を言にわつ樹か
あつらひの尻にききれ鳴りたり
おの尻をききけつてあつらひ
おの尻にききけつてあつらひ
あつらひの子をききけつてあつらひ
あつらひの子をききけつてあつらひ
あつらひの子をききけつてあつらひ
あつらひの子をききけつてあつらひ
あつらひの子をききけつてあつらひ
あつらひの子をききけつてあつらひ
あつらひの子をききけつてあつらひ
あつらひの子をききけつてあつらひ

寒松
羨言
蕉白
護物
少女
幽晴
快意
漫々
女志守
一岸
志院

立後を吹りかれて鳴子なる
 白にさへ老い交りし海子なる
 唯つれてけり花子なるの將らりし
 むら清のてりるのそりりか
 声の絶え尋て鳴花小夜子なる
 心もあつたさうあり小夜子なる
 流をりも絶えにさるや鳴子なる
 子なるも又うりたり山の白
 兼たけり八景の子なるもも来り
 海上の大机系流花子なるわ
 ぬ先のゆくおまてさうく子なる
 心のおまてさうや子なるのそりのと
 やり子なるのそりたるもさうし
 ぬらつて子なる鳴おと如にり
 子なるるくもまて林の日記か
 ね月おはれさうれさうれ子なるか
 旅立の服にけりく之が子なる
 子なるもいふよまよの流の上
 松風ふりさうさうさうさうか
 信しとて扱とく子なるるくゆへ
 傾城の名もさうさうや鳴子なる

馬鞍 瑞之 山量 東高 花好 其狀 如雪 碩高 左文 右勢 伊勢 洪石 尾張 宣彦 能勢 阿十 譽唯 石在 不貞 信濃 月榮 伊豆 米栄 備後 桃園 糸 桂有 女たぐ 女崗 麻 古畧

題叢冬



鴉

ぐら火の松に足違て鳴子なる
 夏荒さたく火のやうな鳴子なる
 ありつるやあつたあつた子なる鳴
 子なるやうと来たたりあつたあつた子
 あり立て月に沈むをいづり
 婿いれを電の右江のういづり
 子なるやうと来たたりあつたあつた子
 あり立て月に沈むをいづり
 婿いれを電の右江のういづり
 子なるやうと来たたりあつたあつた子
 あり立て月に沈むをいづり
 婿いれを電の右江のういづり

鷹 右 乙
 心 阿
 左 弟
 今
 園 文
 橋 忠
 乙 二
 橋 忠
 乙 二
 橋 忠
 乙 二
 橋 忠
 乙 二

鴉のやうな鳴子なる
 日の出やの久しうや鳴子の長
 ありつるやあつたあつた子なる鳴
 子なるやうと来たたりあつたあつた子
 あり立て月に沈むをいづり
 婿いれを電の右江のういづり
 子なるやうと来たたりあつたあつた子
 あり立て月に沈むをいづり
 婿いれを電の右江のういづり
 子なるやうと来たたりあつたあつた子
 あり立て月に沈むをいづり
 婿いれを電の右江のういづり

鷹 右 乙
 心 阿
 左 弟
 今
 園 文
 橋 忠
 乙 二
 橋 忠
 乙 二
 橋 忠
 乙 二
 橋 忠
 乙 二

鴉

吉井のちねたおつてや鴨のや

今

引く音さるるをぬれ池の鴨

吉岡

約をたうとく鴨よりおのしむ

寛松

覽やおのらちを鴨のや

年比

ゆるあさふあけうらや比の鴨

漫

あしく鴨にまこしとまのま

折間

鴨おらあ光のまきまわ

阿量

鴨うくやおく旭のるれをて

筑瓠

子とおてぬえやせはま葉の鴨

瓠瓠

よまのた開の西や鴨のや

焮焮

鴨きしとひのこころをさるる

焮焮

ぬれぬれはらぬさふ鴨のや

焮焮

志うくさぶれうり鴨の浮ん

焮焮

折草を喰むる鴨のりまわ

焮焮

鴨うくやおりまあはるの葉

一水

ある時ふみけすやた池の鴨

久葉

まのしほをぬれぬる鴨のや

吳松

鴨うくまてたお手比のり

焮焮

ふれをさるるしとや鴨の良

左折

まにぬれぬるをさるる小鴨が

焮焮

湯にまき葉のま川ま小鴨が

焮焮

鴨のやとけてあさるる小鴨が

焮焮

小 鴨

題義

あきの成りゆく年冬之日

出

麻古

あきのやちけりしうすはあきの

出

遅

あきの声も人集りてしる

出

元

あきの下月の下にさきうし

出

春

浮

あきの人けりしうすはあきの

出

午

木

あきのやちけりしうすはあきの

出

士

木

あきのやちけりしうすはあきの

出

瑞

木

あきのやちけりしうすはあきの

出

真

木

あきのやちけりしうすはあきの

出

車

木

あきのやちけりしうすはあきの

出

素

木

あきのやちけりしうすはあきの

出

月

木

あきのやちけりしうすはあきの

出

柳

木

あきのやちけりしうすはあきの

出

園

木

あきのやちけりしうすはあきの

出

百

木

あきのやちけりしうすはあきの

出

焼

木

あきのやちけりしうすはあきの

出

白

木

あきのやちけりしうすはあきの

出

薙

木

あきのやちけりしうすはあきの

出

流

木

あきのやちけりしうすはあきの

出

炬

木

あきのやちけりしうすはあきの

出

擗

題叢冬

松林に打たれしつれなきを
 跡にむすく途より松のまは
 鶴舞もさかしくそよよとい
 木くじの鴨とあひなみそい
 大たれりけい合よりそよよ
 介勢ちくとけいもいりあ
 みそいこけいそいそいそい
 入たれりそ考ハヤそいそい
 一そいそい大備児よつれあし
 葉と考ハヤ松林に葉とそい
 松林に葉と考ハヤそいそい
 忘れしそいそいそいそい
 文そいそいそいそいそい
 一そいそい松ヤ一尺おあす
 松の葉売らるそいそい
 小坊のそいそいそい
 あり松や松林にそいそい
 二そいそいおれそいそい
 飛つそい松の松くそい
 ちそいそいそいそい
 口そいそいそいそい

成英 土左 徳勝 道彦 月紀 一葉 考笠 木海 夢首 一人 松林 万和 松長 葉売 松老 食松 女 坊自 松長 左民 唄二 不義

題叢冬

子	子	吹草	陽火	禱
子	子	草	火	禱
子	子	草	火	禱
子	子	草	火	禱
子	子	草	火	禱
子	子	草	火	禱
子	子	草	火	禱
子	子	草	火	禱
子	子	草	火	禱
子	子	草	火	禱

子	子	吹草	陽火	禱
子	子	草	火	禱
子	子	草	火	禱
子	子	草	火	禱
子	子	草	火	禱
子	子	草	火	禱
子	子	草	火	禱
子	子	草	火	禱
子	子	草	火	禱
子	子	草	火	禱

題叢冬

まのこしやまふをきして跡叩
 ありけり尤位子原に跡叩
 抗業、積れきる跡叩
 丁鴨の中をのきく跡叩
 おとこふた花に死ねる跡叩
 跡叩、あつちありたむらひやに
 跡叩、あつちをたれさうらうら
 夢ハ折る瓜抗て跡叩
 跡叩、いふありけるさくさか
 跡叩、屋の元ハせきき
 小道や青の院の跡叩
 あつち、積良元を跡叩
 跡叩、秋のまのあつちを
 男まのてふ村を跡叩
 木の底たいてきる跡叩
 跡叩、花に跡叩、男、丸
 葉刺て逢く跡叩
 懐にさくさくさく跡叩
 美登、丸、賞、八、房、丸、跡叩
 まのき、青の、つて、丸、丸、跡叩
 跡叩、跡、丸、丸、丸、跡叩
 丸に、丸、丸、丸、丸、跡叩

瓜
 一子
 養丸
 奇園
 道差
 瓜
 等差
 真々
 素林
 塊真
 積差
 鹿松
 府人
 瓜
 美々
 竺々
 相々
 芥席
 女
 丸
 金丸
 着井

題叢冬

後子のりけりたのこそまのる
山星や子を懐ひまのる人
山をたふさるるるるるの枝
まをさるるるるるるる一掃
芥のみに湯るるるるるるる
まのるるるるるるるるるる
水もろろるるるるるるるる
むつやふ糖るるるるるるる
大代やまてるるるるるるる
大まとのりてあるるるるる
まのるるるるるるるるるる

人 祥香 平角 冥く 味あ 道老 公 養地 万和 素犯 漢物

古来はらのれれれれれれれれ
まのるるるるるるるるるる
まのるるるるるるるるるる
あつり人るるるるるるる
つるまそとんや子のりてまのる
松のまや一まをり一まのり
まのるるるるるるるるるる
まのるるるるるるるるるる
海毛まのるるるるるるる
まのるるるるるるるるるる

年代 菊也 松乃 湖中 小龍人 籠喉 布席 壺中 喜良 史子 阿景

あきし〜 根にこぼるるの 雲

雲 雲

止む凡や雲の中越に梳るる

伊豆 雲 雲

わ〜 雲の沖に打りしや流の青

松 雲

雲に打りて眼きとくたの夜や

雲 雲

鬼齒奈も蘇鉄も雲の且小

白 雲

お雲やよ〜 舞〜 娘〜 雲

大 雲

神にはく松玉も雲の雲

松 雲

旅人の持〜 雲〜 雲の雲

一 雲

お山や凡も雲も雲の下

對 雲

お雲や雲〜 雲〜 雲の雲

右 雲

お雲や木〜 雲〜 雲の雲

右 雲

お雲や麻の〜 雲〜 雲の雲

右 雲

し〜 雲〜 雲〜 雲の雲

白 雲

雲〜 雲〜 雲〜 雲の雲

巴 雲

け〜 雲〜 雲〜 雲の雲

雲 雲

雲〜 雲〜 雲〜 雲の雲

今 雲

換に小〜 雲〜 雲〜 雲の雲

存 雲

序〜 雲〜 雲〜 雲の雲

拒 雲

雲の〜 雲〜 雲〜 雲の雲

接 雲

う〜 雲〜 雲〜 雲の雲

成 雲

雲

雲

題叢冬

雲のあや天のほをさす代

雲里

アももくもく東より雲七

送産

瓢の音を雲が八妙と出りけり

雲松

色角の美のうりくと雲がわ

雲松

枕邊をわく風をわの雲

玉屑

すんくと雲が霞のあひの松

雲霧

鶉はより起て飛ぶ雲の嵐

床人

雲のあひの二万葉のこり灯

白塘

凡のあひをくろりたる雲がわ

干島

船にたつこころのあひや雲の音

葛頂

花うらりし雲はあひの雲がわ

雲松

雲士の火の雲まや雲のわく雲が

松江

満月のちんちんたる雲がわ

牡丹

人々のあひをくろり雲の雲

柳葉

雲つみれあひをくろり雲がわ

閑文

雲のあひをくろり雲の眉をさ

白樺

唐までも雲をくろり雲の雲

白樺

雲はちて雲をくろり雲がわ

白樺

雲のつみれあひをくろり

白樺

雲のあひをくろり雲の雲

白樺

雲のあひをくろり雲の雲

白樺

雲のあひをくろり雲の雲

白樺

題叢冬

狭くをて黄より赤を度ふや

女星布

魚を以て口をききし是のを

成員

此やとちたれく尺をてをの人

今

立おれハ麻焙くやをの前

丘字

白をや子道の隈にゆゆく

可羽室

をの者不足をいそややさん

昔三

をよれの雀ありたり園の井

屠就

白をの物つあつ浮世わ

堀海

大名にろうても尺一旅のを

南山

四方をく世をいんをの心

真と

夏亮はゆや物も世このを

道亮

をの人をるくに改せれ情こ

自天

おのよまて尺を善のまや度のお

養凡

より度の白を為れ馬りれ

尺丈

常好といハ榮耀に園分り

自化

ふれに別くくちをの麻

麦葉

山人のちんをるれは茶や

平角

ありりいふをの浮世や世のち

楳葉

をのちをれは村より人よ素は

堀前

とく起てハ井く小若をとりく

新の司

題叢冬

霞まのふりへハをハちるまのた
 りふれハ流に流てさへをの人
 人に来ててもうりさへをのさ
 かに来ハ行 振舞んをの人
 兼とれハ流らへんやをのさ
 空のハやおらへんさる人の良
 花をハ鳥さるうりや二ハ
 柳まさうさぬをのすのハ
 うけうりあハ流れさるをのさ
 とおやをの且の晴り
 木のまふちおちもけハをのさ
 櫻ハ下流ハをハハれれて
 空の流浮世のさるさるもわ
 花のをやおさるさるさるさる
 こそれさるおとけりさるさるのさ
 四方さるりあさるさるの且ハ
 左のハさるさるつれぬ日とを
 さるのさるさるさるのあはさる
 むく起れさるさるさるさる
 けさるつれぬハをの卯ハハ
 そこのれハれぬさるさるの流
 流士のハさるの流さるさるの流

唐如
 東菊
 唐園
 唐流
 女文
 唐葉
 唐石
 女苗
 唐麻
 唐花
 唐流
 唐流

題詩

霞まのふりへハをハちるまのた
 りふれハ流に流てさへをの人
 人に来ててもうりさへをのさ
 かに来ハ行 振舞んをの人
 兼とれハ流らへんやをのさ
 空のハやおらへんさる人の良
 花をハ鳥さるうりや二ハ
 柳まさうさぬをのすのハ
 うけうりあハ流れさるをのさ
 とおやをの且の晴り
 木のまふちおちもけハをのさ
 櫻ハ下流ハをハハれれて
 空の流浮世のさるさるもわ
 花のをやおさるさるさるさる
 こそれさるおとけりさるさるのさ
 四方さるりあさるさるの且ハ
 左のハさるさるつれぬ日とを
 さるのさるさるさるのあはさる
 むく起れさるさるさるさる
 けさるつれぬハをの卯ハハ
 そこのれハれぬさるさるの流
 流士のハさるの流さるさるの流

唐如
 東菊
 唐園
 唐流
 女文
 唐葉
 唐石
 女苗
 唐麻
 唐花
 唐流
 唐流

をね取(長歌)後(下)取のそ
おの。おの。た。は。は。おの。おの。
志。は。く。と。取。に。ま。あ。り。おの。おの。
おの。おの。おの。おの。おの。おの。
おの。おの。おの。おの。おの。おの。
おの。おの。おの。おの。おの。おの。
おの。おの。おの。おの。おの。おの。
おの。おの。おの。おの。おの。おの。
おの。おの。おの。おの。おの。おの。
おの。おの。おの。おの。おの。おの。
おの。おの。おの。おの。おの。おの。

几童
白
麦
保
火
照
長
兼
年
秀
可
今
今
無
三
採
漫
護
有

おの。おの。おの。おの。おの。おの。
おの。おの。おの。おの。おの。おの。
おの。おの。おの。おの。おの。おの。
おの。おの。おの。おの。おの。おの。
おの。おの。おの。おの。おの。おの。
おの。おの。おの。おの。おの。おの。
おの。おの。おの。おの。おの。おの。
おの。おの。おの。おの。おの。おの。
おの。おの。おの。おの。おの。おの。
おの。おの。おの。おの。おの。おの。
おの。おの。おの。おの。おの。おの。

有以

題

残端して片ける一帯のいふ事乞

徳貞 園虎

大帯よりとるうねる大武士

伊豫 子鳳

白帯の林月夜に似て似たり

白園

白帯の帯をゆるぎ合ふ風情也

士郎

白帯を折しうらうら井の秋

公

白帯やまも木の生とる葉も

妻郷

白帯も折れ帯よりこぼれぬ

枯堂

白折しんある帯の隙さうや

万和

白帯の末方のいふ小折也

意旨

白帯の上にはやまもも月夜也

志守

白帯の帯は月夜に似たり

前

大やうな月のいつるやあはれ山

丸園

白帯よりやまももひねり也

尾張 牛車

白帯を折て片ける月の末方也

垣陽

白帯の波ありやう月夜也

文勢

白

帯

帯は人かせよとる挿とて

寛吉

白帯の帯りあはれもあはる

権吉

折るもえん一帯は帯の帯

白帯

折風を挿へてはる帯也

恒元

大帯やあはれ人海る角力也

振佛

帯は帯又一人のうらめ

可勢

帯は帯に人良足ぬる帯也

成貞

題集冬

大寺中やおれうれて子 規
 大寺の上はまきこる月口丸
 深き水のえりも静し
 大寺やえりもくさ歌の鳥
 寺つじや鳥の寺のくさまて
 有る寺と鳥の集るまじは寺か
 つりて寺くおん村か
 寺の山ふらうよ深き水
 つじの寺の鳥もまじは山か
 寺あつと深き水と寺の山か

備中 雲石
 野鳥
 定規
 木海
 孤山
 拾遺
 瑞千
 瑞千
 下弦
 葛城
 代書
 於石

寺人のいへる根寺そ深き水
 寺の山やと抱る寺の鳥
 寺の寺をてなけ傘の鳥
 寺の寺の寺の寺の寺の寺
 寺つじや鳥の寺のくさまて
 有る寺と鳥の集るまじは寺か
 つりて寺くおん村か
 寺の山ふらうよ深き水
 つじの寺の鳥もまじは山か
 寺あつと深き水と寺の山か

鐵船
 斗入
 喜袋
 土物
 瓜
 乙二
 魯派
 白人
 瑞千
 瑞千
 武後

題書冬

わさくしむりしあけくまのた

はみ干すやあまの里のきの上

ゆふあつさうんゆふやきの上

むふあふや用が素ひあまの上

きよまきふ 風情さるか崎の松

おのふもふさふもきの上 枕や

き若底やかひあまのきの上

きひりうふあてきさるきの上 林か

き海まてはまふあむさうきの上

ききまてうすむひんきの上

きのきまてうすむひんきの上

きりひむかひの洞き上れつきの上

き原は只ふ接てきの上 原

き足れかかふありきの上

き人ひり立てあけ入きの上

き海つしを押へてきの上 波口か

ききおれにふさやうにきの上

きむこんげんげん世はまきの上

き物のよりきさうきの上 浪津

き磯流やうらうらきの上

き漁かきう一浦に臥のきの上 焼

き心はゆしとるきさるきの上 貝原丸

東高

松江

子崖

史子

陸平

三徳

崎崎

尾尾

乙二

林久

妻清

重厚

不零

羨多

乙周

無物

尚山

也青

園更

菩提

保吉

願叢冬

滑してりーりたる水なる雪の糸 春 雲

雪 雪 初々たる雪の糸なる雪の糸 春 雲

雪 雪 やあつらふ雪の糸なる雪の糸 春 雲

雪 雪 暁や雪の糸なる雪の糸 春 雲

川 雪 けりしと霞すりたり雪の川 春 雲

雪の川世に曲らぬまのりー 春 雲

雪の川世に曲らぬまのりー 春 雲

雪の川世に曲らぬまのりー 春 雲

雪 雪 雪の川世に曲らぬまのりー 春 雲

雪の川世に曲らぬまのりー 春 雲

雪 雪 雪の川世に曲らぬまのりー 春 雲

雪 雪 雪の川世に曲らぬまのりー 春 雲

雪の川世に曲らぬまのりー 春 雲

雪の川世に曲らぬまのりー 春 雲

雪の川世に曲らぬまのりー 春 雲

雪の川世に曲らぬまのりー 春 雲

雪の川世に曲らぬまのりー 春 雲

雪の川世に曲らぬまのりー 春 雲

雪 雪 雪の川世に曲らぬまのりー 春 雲

雪 雪 雪の川世に曲らぬまのりー 春 雲

題叢冬

常 兎 扱ふ方は應つてこそ常兎
常 吹 有るこそ刀投はた 常吹か
常 兎 扱ふ方は應つてこそ常兎
常 吹 有るこそ刀投はた 常吹か

常 兎 扱ふ方は應つてこそ常兎
常 吹 有るこそ刀投はた 常吹か
常 兎 扱ふ方は應つてこそ常兎
常 吹 有るこそ刀投はた 常吹か

常 兎 扱ふ方は應つてこそ常兎
常 吹 有るこそ刀投はた 常吹か
常 兎 扱ふ方は應つてこそ常兎
常 吹 有るこそ刀投はた 常吹か

常 恒 常恒や懐へきふちり
常 竿 常ととれは常ととれぬ
氷 常 常ととれは常ととれぬ

常 恒 常恒や懐へきふちり
常 竿 常ととれは常ととれぬ
氷 常 常ととれは常ととれぬ

題叢冬

凡形の木を引上るる居りか
 大木の葉にけりし少少
 石に事あり居る少々
 赤板ハ木をうつりありか
 梅の咲きもあらう厚少
 木の葉も凡や少れ新白
 子の戸や小田の少れも
 五木ののりも又あり厚少
 と居くと赤物の上は少
 桐の葉は居る以て厚少
 小居る赤物の鮮た少
 けりありありありて居る
 少居る人目にくるまのり
 遠のこりな赤物のこり少
 赤のすりく少々
 隙のすりく少々
 薄少やあり居るの少
 青く居るを少々
 有り少れ瓶より少
 張強や少れ少々
 たくもて少れも少
 貝壳のあり少

栄兆
 今
 遷
 成
 今
 完
 然
 冥
 匠
 義
 秀
 白
 大
 派
 守
 志
 水
 眞
 星
 折
 文

頭叢冬

水 氷 氷 氷

他に氷にうらめてある氷は
江の底の氷は凍りて厚
冬の中を木こいた氷は
穀の下の氷は厚く
湯あがりにつまきそてた氷は
ひくきりて入り口のつらさ

林系
佐橋
寒松
初霜
枯園
寒左

お別れの長短ある氷は
いく節も氷は凍りて
徳代てつけた氷は
新の氷は氷は越える

氷
紅羽
不寒
白化

井橋の氷は越えりぬ
葉とて人々の心に
焚きて銀井の氷は
花弁の底の氷は
葱葉の底の氷は

葉松
秋蓋
白葉
白葉

氷 氷 氷 氷

氷は氷にうらめてある
氷は氷にうらめてある
氷は氷にうらめてある
氷は氷にうらめてある

白葉
白葉
白葉
白葉

氷

氷は氷にうらめてある
氷は氷にうらめてある
氷は氷にうらめてある
氷は氷にうらめてある

白葉
白葉
白葉
白葉

氷

氷は氷にうらめてある
氷は氷にうらめてある
氷は氷にうらめてある
氷は氷にうらめてある

白葉
白葉
白葉
白葉

氷

氷は氷にうらめてある
氷は氷にうらめてある
氷は氷にうらめてある
氷は氷にうらめてある

白葉
白葉
白葉
白葉

霜最冬

雲

雲の凍てつくもさるの雲か
 氷凍に押あす子の小雲か
 凍る物や一息つゝの凡の雲
 木も雪もやま凍るや凍る物
 古代に雪履況こぞ雲か
 雲の在るはるに云る雲か
 口もくも雲れにわく雲か
 こぞくも魚の雲も育か
 人こそとよ良わくを雲か
 こぞくもや雲れはる小雲か

保吉
 人
 後お
 去卵
 摘有
 雲村
 雲左
 白橙
 保吉
 雲崎
 道亮

雲

雲の凍てつくもさるの雲か
 氷凍に押あす子の小雲か
 凍る物や一息つゝの凡の雲
 木も雪もやま凍るや凍る物
 古代に雪履況こぞ雲か
 雲の在るはるに云る雲か
 口もくも雲れにわく雲か
 こぞくも魚の雲も育か
 人こそとよ良わくを雲か
 こぞくもや雲れはる小雲か

雲
 雲
 雲
 雲
 雲
 雲
 雲
 雲
 雲
 雲

雲

石蕨花

今、葉に採ふべきは、浮世に
 なく、葉の力を入れて、咲に、
 咲へ、下は、行きて、あるを、
 淋し、その、目の、けり、る、
 梅、め、る、て、つ、は、咲、家、の、
 日、つ、ま、る、海、法、は、
 是、其、の、心、を、こ、る、
 さ、さ、の、の、わ、く、た、
 石、蕨、の、梅、を、
 約、五、く、
 学、の、梅、と、
 早、梅、
 冬、梅、
 梅、一、
 冬、の、梅、
 上、風、
 咲、と、
 と、
 冬、の、
 雪、の、
 冬、の、
 冬、の、

遊世
 春省
 華村
 夏古
 係吉
 送差
 自流
 有雙
 陸奥
 樂の
 白羽
 班象

早梅

冬梅

冬、梅、
 冬、の、梅、
 梅、一、
 冬、の、梅、
 上、風、
 咲、と、
 と、
 冬、の、
 雪、の、
 冬、の、
 冬、の、

班象
 冬梅
 華村
 夏古
 関梅
 喜梅
 恒丸
 人
 梅堂
 真田
 送差

題叢冬

ことつふ館たふそそそそ
 ふ人のふふふふふふふふ
 湯人やたふふふふふふふ
 ちふふてふふふふふふふ
 花もふふふふふふふふふ
 浮おひふふふふふふふふ
 をうふふふふふふふふ
 周のふふふふふふふふ
 津のふふふふふふふふ
 組板にふふふふふふふ
 海士り子ふふふふふふふ
 二おふてふふふふふふ
 松風ふふふふふふふふ
 松風のふふふふふふふ
 いら流のふふふふふふ
 今ふふふふふふふふ
 ふふふのふふふふふふ
 秋風のふふふふふふふ
 後のふふふふふふふふ
 ふふふのふふふふふふ
 智老弱志中入たふふふ

白権
 喜登
 保吉
 士朗
 全
 完素
 善之
 祥来
 藤古
 一子
 月虎
 星子
 二人
 貴地
 善祥
 角栄
 悦吉
 善村
 全
 全
 白権
 大江丸

穀

題叢冬

綖

綖

あゝくれさたたりい園のり

護物

綖

いあや綖綖にむよまをさ

自蒸

綖

山鬼この跡れの片り

甚村

綖

曉や綖の吼るまの海

吹雪

綖

大坑の画のふり種もあゆみ

長島

綖

綖よさるに指をさかく山鬼

村々

綖

唯の跡進み綖に鳴る

二鶴

綖

くさげや山鬼て見たる山鬼

等亀

綖

かゝ綖に腰する者大翁

甚村

綖

く綖や帯の友のまを

今

綖

く綖やまの月ハ腰

周更

綖

女籠のハむすはぬを思ふ

白檀

綖

く綖に小町の葉を打たる

保吉

綖

く綖に名刺の伸るる

几童

綖

く綖を帯のよれまを

重厚

綖

于綖にふれたる下

徳昌

綖

く綖に風植はく

葛之

綖

く綖个思焼

美々

綖

く綖をさしたる

送彦

綖

く綖や刺友取

月代

願叢冬

綖

く綖のさしたる

嵐印

護物

御所者白鳥業をたす

御走

扶桑左弁新

ふまきしりし御走の考物
松風の世にまきしりし守り
浮遊ひりし孫まのわらう御走や
はらふまのまのや御走の孫すり
百姓の枝戸及ひりし御走や
さうくと葉けく御走月夜か
あかひのまきしりし御走
目かたのまきしりし御走
まに及ひりし御走

標
左
右
村
白
旗
左
右
保
左
右

題叢冬

〇 141

しげ子葉をさしあはしたる處か
急に塩漬世の人れを以て
丁物の上もさしあはしたる
しげ子兒にあんとる遠か
いとともえんは子の帆蓋あ
勢ゆるまのやしげ子のねる
目のあいてえれかしげ子のえり
兼長ふやしげ子に海北約の子
白をかしげ子の山の影初
杜の白しげ子のすん入れり
船影と人あはしたる

長松
崎石
今
杉人
長翠
標堂
全
丈左
岸飛
尺丈

しげ子あはしたる兼長ふやしげ子
月のりも解けたるしげ子か
花より急な枕もしげ子か
山里にしげ子をえりし梅屋
豆煮に急考るあはしげ子
山里につれ押しげ子
雪のあはしたるあはしげ子
あやめくしげ子しげ子の
飛雪あはしたるしげ子の
美雪あはしたるしげ子の
木に林に花のあはしたる

道長
寛松
彦人
養子
渡鳥
且
子孫
玉之
芽丸
太
嗽石
枕
双鳥

題葉冬

そのり大芦一本を居りたり

そのり大芦一本を居りたり

そのり大芦一本を居りたり

そのり大芦一本を居りたり

そのり大芦一本を居りたり

そのり大芦一本を居りたり

そのり大芦一本を居りたり

そのり大芦一本を居りたり

そのり大芦一本を居りたり

そのり大芦一本を居りたり

そのり大芦一本を居りたり

そのり大芦一本を居りたり

そのり大芦一本を居りたり

そのり大芦一本を居りたり

そのり大芦一本を居りたり

そのり大芦一本を居りたり

そのり大芦一本を居りたり

そのり大芦一本を居りたり

そのり大芦一本を居りたり

そのり大芦一本を居りたり

岱喜 喜所 有亞 休尖 士政 共翠 公 標堂 女 世 成英 公 喜牛 東境 乙二 道亮 号登 百池 善多 既籟 拏磨 好古

その日の程おぼくは到るまで

信松 彦

心の奥つらきあやもれおのりか

古武

そののれん細さき葛 深

斗白

紙の書写しきよおのりか

芒村

そのおやまきくはぬ 電

筑志

そのおやかたのちよき後る

白権

そのおやかたの研し作男

在亞

そのおやかたの又は汁のち

士郎

そのおやかたの先の大のち

長翠

そのおやかたのまじりた手

成若

そのおやかたのまじりた手

美郷

そのおやかたの松丸のち

鞠凡

そのおやかたの針考其まき上

雪梅

そのおやかたの豆まき白の言

梅侯

そのおやかたの足らぬ男の死

百城

そのおやかたの嵐のちかき元

周平

そのおやかたのあきる意 烟

会

そのおやかたの大机のちかき元

芒村

其人のかくて残るちかき元

斗白

其人のかくて残るちかき元

斗白

斗白

冬

冬

題叢冬

水志寒

冬

よしありとともあはるしをさる
 鴨のさるつゆとさるをさる
 唯も周さいとけし水の志
 ありるし家おあむ寒れす
 詩の傳に流伝無れんを流
 ねく天井し乃れれいをさる
 取ひてて自見にれりて流
 天賦て系にうあ人れりり
 冬流の誓を人の心れ傳
 揮ひつる系をぬるやをさる
 流のぬるあいのんよをさる
 冬さるし條あのをさるに人ぬ
 冬さるし葉火にそる服流に
 現著室稗の皮やをさるり
 冬流の流て周にれりるしわ
 やりるもあそるれぬをさるり
 上れ下る流いそのそを流
 冬流の流は青もまをさるす
 冬流の流は依保娘やをさる
 冬さるり系は子外やをさる
 冬さるり系は子外やをさる
 冬さるり系は子外やをさる
 冬さるり系は子外やをさる

題叢冬

道是 今 岨是 目化 冬流 標元 蒼古 芒村 今 院家 白檀 今 周子 隆石 今 斗入 今 恒元 松見 存正 流昌

雪をまわす月ありてをさり

淡路 岳

をさりて美に折く梅の花

江戸 竹

月花を定めて標木を

覚

冬の日やゆきやうる月

巻

冬の日つるまふささげや

園

洲のぬね治く藤花や冬の日

白

をばしる親まうた冬の日

桃

冬の日大月うちの心の上

感

冬の上に暮んすれあ冬の日

保

標やまうらうる冬の日

炬

大肉煮つ替代りる冬の日

丸

美しうまうめ冬の日

士

あまそくに周子おたり冬の日

公

さうくと若ふじ冬の日

公

さまのれ海あく冬の日

肩

百人うまの喰ふ冬の日

標

冬の日いさる冬の日

瓜

冬の日人れを匿て都の

城

梅るとも梅く冬の日

城

冬の日やゆきや冬の日

公

子まき山部標丸冬の日

公

標丸の雪鳴や冬の日

公

題叢冬

光よりもさかたきしむるの月
 柴のすもあしふるまの光の月
 月めよりあまふくせいの光の月
 龍虎のまをぬきたるの光の月
 冬の日ほもこしう山の上
 冬の日あもろふ流のまをさか
 雪のころは葉のひらやの光の月
 あく海にそそぐやまぬく光の月
 松のころころや入浪光の月
 月をさしとある安井の光の月
 冬の日代歌にさる涼の月
 氷破りて池とにぬきさるる月

秀九
 菅原
 梅麿
 甲斐
 方流
 京
 菅原
 中
 晋和
 亞樂
 梵志

冬の日や松本中の方三筆
 冬の日や辰のあふ物良あく
 冬の日や吹らふれたるの光の月
 冬の日やうらりと控る鶺鴒光
 冬の日やよりそふをれ力か
 冬の日や流をさつめく世経
 冬の日やうらやうと兼の角と角
 冬の日やまのさばらと答は
 冬の日や柳をさかたきさる月
 冬の日や月代書よ男より

冬
 菅原
 白旗
 朝者
 大江元
 士郎
 向有
 木僊
 華泊
 成良
 朝野

楷

きりや星に程の後つみ
 大さや八月片し下松の月
 きりやるのをある沖は凡
 きりや垂宿のさなる筆の書
 新又八月のさなる筆の書
 きりや凡のさなる筆の書
 きりや筆の筆の筆の筆
 おうと八月のさなる筆の書
 きりや後にもる筆の書
 人かきりや八月のさなる筆の書
 結究つる筆の書

如 沈
 一 葉
 字 洋
 車 兩
 新 眉
 婦 中
 女 吳 衣
 花 介
 古 笥
 白 燈
 保 吉
 存 亞
 乙 固
 照 丸
 猿 左
 了 介
 標 堂
 今
 葉 北
 一 葉

頭兼冬

おのれ入心やり跡は古きより
一り此業や氣をこころするより
大り業てしむるをといふ氣を
ぬくより此業は人の心は紙を
折ふより此業は人の心は紙を
花を折るより此業は人の心は紙を
折りしより此業は人の心は紙を
おのれにまけていふより此業は
紙を折るより此業は人の心は紙を
折るより此業は人の心は紙を
折るより此業は人の心は紙を

善なる
寛松
一
雲峰
一府人
長高
武陵
都賀
李天
南岳

紙衣

紙の強さ付る紙衣なり
紙衣を花に凡るより此業は
おのれの心より此業は人の心は紙を
老子心は折し世にあり此業は
飯粒て此業は人の心は紙を
裁層は折れられてくことわ
二衣やそそり割し古きこと
衣を折るより此業は人の心は紙を
折るより此業は人の心は紙を
折るより此業は人の心は紙を
折るより此業は人の心は紙を

常陸 知水
米花
徳島
五木
今
寛右
白旗
凡
徳島
松見

題叢冬

子見見女... 二人扶持... 古心... 芦鴨... 兼... 子...

完素 成素 伊 護物 日人 雲山 淡塵 柔亮 菜心

蒲園

子... 子... 子... 子... 子... 子... 子... 子... 子... 子...

應 全 應 應 應 應 應 應 應 應

題兼冬

まうけし時より法し條に延

其季はも来たりる解のさるる

りちまつくも其れ小かまうり

極の末もかて悔つ小かか

糸の末もさうれしつ悔なり

解花の木陰にてちあひつ

解もやちる多しのさるて

年 解 悪てる進ふ年の末す

年 本 蕉 身も入ひや小枝も折れまうり

たう中にも極のやせもまうり

年 本 心 帯の釣の小あか

年 本 心 帯の釣の小あか

年 本 心 帯の釣の小あか

年 本 心 帯の釣の小あか

年 本 心 帯の釣の小あか

年 本 心 帯の釣の小あか

年 本 心 帯の釣の小あか

年 本 心 帯の釣の小あか

年 本 心 帯の釣の小あか

年 本 心 帯の釣の小あか

美古

道亮

月虎

子龍

一葉

今

白玉

白圓

茶木

恒丸

善成

柳慶

来之

保吉

唐人

園文

几董

雪笠

無隠

宿人

秋左

三及

書

裁

裁

か

気

か

ま

懸書

年 越

年越やたも管家の新編水と
とこやばあよりよるん小

江戸 轆舟
飛原 施魚

多発の青中道守一校小

三徳 奇剛

身よりてをやアアありし小

三徳 菊采

厄 払

厄を払いぬらぬるを日華水
端崎のせうはあつり厄払

言方 素丸

やももい案りにくはく打りふ

三作 月磨

本元に見つけくわたり厄除し

花とまやや築地のあつりすて

乙二 塚屋

夷洋はあつりともあつり花水

花として藤よりけりあつり味

素丸 柳井

編 揮

花季小

花季小 花久の枕をくは花季小

成員 成員

花季小ははくはく人のあつり

あつりはくはくはくはくはく

人 人

はくはくはくはくはくはく

祥来 祥来

はくはくはくはくはくはく

一子 一子

はくはくはくはくはくはく

道彦 道彦

はくはくはくはくはくはく

一子 一子

はくはくはくはくはくはく

布席 布席

はくはくはくはくはくはく

題書冬

せうらう井を叱て海りりり

去耕

鷗飛に教もやうや花雪の

茶花

せうらや竹も折りてさうさ

三鶴丸

年内五志

まめくぬ詞き入やこの肉

女子代

こゝとも言ひよもかき柳

薙左

まきつやいまるおさあの本意

喜海

このうらな言ふ来れん言は

士郎

鴨ろくやえや喜まろく物折

成兵

天に只り言ひよもかき

不寒

この尾をひきよひん丸

鐘吸

市

この市言ひよもかき

保吉

この市梅さうとて海りり

志什

厂物さうあて然りやこの市

松井

この市誰に言ふよ古鏡

完素

まきまて圓くさうこの市

道亮

この市了ん膝さう海りり

身化

小刺さう言ふもやうこの市

養人

まきまて言ひよもかき

飛雪

この市梅さうとて海りり

可凡

この市誰に言ふよ古鏡

其業

まきまて言ひよもかき

養人

この市了ん膝さう海りり

其文

小刺さう言ふもやうこの市

題叢冬

の松立 日夕度ハ松立に立て寝ひたり

古 房 人作几ろり松根の古こすろり

房 眠るハ大樹と有りあそびさき

房 房美是元辰ハ若きなり

房 乞食せんを野野の房より

房 鯛之を平河と云ふ人有り

忘 夜中にて心も忘井ハ遠うか

忘 いふ所ハや縁ふすれハ遠うか

忘 忘忘忘にやてぬめたり

忘 うす忘にけ 嘆息ナリ 忘

忘 忘忘忘に大なる松を忘るるなり

忘 忘忘忘に忘るる 忘忘忘忘り

忘 忘忘忘に忘るる人や忘忘

忘 松の木にけりて尺や忘忘

忘 忘忘忘に忘るる人や忘忘

忘 忘忘忘に忘るる人や忘忘

忘 忘忘忘に忘るる人や忘忘

忘 忘忘忘に忘るる人や忘忘

忘 忘忘忘に忘るる人や忘忘

忘 忘忘忘に忘るる人や忘忘

忘 忘忘忘に忘るる人や忘忘

周舟

几蓋

一草

寛松

不轉

忘人

美左

松元

美丸

美舞

大江丸

松島

柳庄

美繁

忘人

松岡

直美

梅向

二蝶

美村

方角

道彦

睡書々

新 年

竹を高くあつてふらふらと風の音

をくしめしきりしりしりしての音

海を渡る舟の音や松枝の音

の音と日あり 日あり 天は丁

掃く音と草の音のり次で

けりや孝子にのみ来ぬ儀

けりや大衆とよこつてゑりけ

けりやのこもくももぬいぢや

けりや名をよは陽に梅枝

けりやとまふも美人の浮橋に

けりやのりありしりしり梅の影

けりやのりありしりしり梅の影

けりやや磯人町の年の音

けりやや親なるも年の影よ

けりやのいへしやまの目安か

けりやとむらひ徳のりまへか

けりやとむらひ徳のりまへか

けりやとむらひ徳のりまへか

けりやとむらひ徳のりまへか

けりやとむらひ徳のりまへか

けりやとむらひ徳のりまへか

女 志 其 の

助 産 女

産 女

産 女

産 女

産 女

産 女

産 女

産 女

産 女

産 女

産 女

産 女

産 女

産 女

産 女

産 女

産 女

産 女

産 女

産 女

題 歳 冬

けしきの洞けしきの歌の杖

陸奥

貞中

けしきのうらけしきの歌の杖

陸奥

杖唐

けしきのうらけしきの歌の杖

陸奥

けし

けしきのうらけしきの歌の杖

陸奥

先郷

けしきのうらけしきの歌の杖

陸奥

梅子

けしきのうらけしきの歌の杖

陸奥

存世

けしきのうらけしきの歌の杖

陸奥

午心

けしきのうらけしきの歌の杖

陸奥

東高

けしきのうらけしきの歌の杖

陸奥

藤之

除夜

大とくは雪の埃もさかろり

陸奥

寛喜

大とくは雪の埃もさかろり

陸奥

保吉

大とくは雪の埃もさかろり

陸奥

芳之

大とくは雪の埃もさかろり

陸奥

乙二

大とくは雪の埃もさかろり

陸奥

道亮

大とくは雪の埃もさかろり

陸奥

新岡

大とくは雪の埃もさかろり

陸奥

右塩

大とくは雪の埃もさかろり

陸奥

去所

大とくは雪の埃もさかろり

陸奥

馬年

大とくは雪の埃もさかろり

陸奥

英お

題兼冬

世了因樂教下たのふも此ありて何さひん
 五、以なけうち銀を何やとまは子火をのそ
 入ると思を味をまのす味や何しなと
 出れくのわき人のめか、そまは守あを
 志記まてのり、残る寸是を志ううに於て
 外ろをる包あるすも何んたを此まに
 なましくてはひんを何ん満をほあや

題呈取跋



五ノ月

備して化意は功はもくハ解の紐を、何や定
 里玉、致好也うに妙不可言、是もぬハ次うけ、
 河とらなるぬ、すて庵丁、かゝ乳輪扇
 う輪おのく、とれ心、了は、す、前ハ言、成、て
 論、す、と、出、あ、ひ、了、あ、り、次

随斎 筆 文 跋
 水

金花堂藏板目錄

日本橋南通四町目

須原屋佐助

源氏忍草

五冊

成島公序

此書ハ源氏物語一巻の大意狀、初學ハ此ハ得也、と云ん
 こと、又ハ小冊、と云うたこと、たゞ、と云うこと、あり、源氏を
 読む、又ハ、人ハ、心、を、ま、げ、る、み、は、ひ、は、り、と、云、ま、あ、り

萬葉集摘の落葉

五冊

正木千幹大人輯

此書ハ、歌、の、く、物、の、ん、と、云、る、知、名、の、こ、の、み、ま、り、を、
 集、れ、申、の、事、と、云、う、た、め、づ、ら、に、和、を、歌、を、こ、の、み、ま、り、を、
 ま、う、け、く、と、云、う、事、と、云、ふ、
 一の巻 天象の部
 二の巻 世儀の部

佛字考

岡田真澄大人著
鵬齋先生漢文序
濱臣大人かお序

此書の假名を以て漢字を考ふるものなり其の考ふる所は
そのまははひあるに依りて文字の考ふる所ありぬれ
あるを五十音の成り方をも考ふるなり考ふる所
たるあり其の考ふる所人の考ふる所を考ふるなり
書法を考ふる人の考ふる所あり

新韻集 一冊

真海 柏木先生輯
素堂 山本先生校

此書の詩の上より文を考ふるなり其の考ふる所は
の人物を考ふるなり其の考ふる所は
新なるものなり其の考ふる所は
ありて考ふるなり其の考ふる所は

申書考の考ふる所は
ありて考ふるなり其の考ふる所は

新仙繪抄 一冊

藤原正臣先生著
喜多武清先生模畫

此書の仙者の考ふる所は
ありて考ふるなり其の考ふる所は

言え様 一冊

大石千引先生著

此書の言の考ふる所は
ありて考ふるなり其の考ふる所は

字と所く人一人とあり

俳諧年表録 十冊

咫尺齋豊山翁著

此書の真意は世に知らぬものありて、あつては、その名前の生後、其事は終つて、其の意は、一とあることあり

俳諧人名録 二冊

東都惟草芥昇先生輯

此書の、その世の俳諧、其の人名をいふは、その下、其の意をいふことあり

俳諧發句題業一冊

椿丘太郎翁輯

此書の、和句題、其の妙ありて、近代の作家、二千

七千二人の、その句とあり、その意をいふことあり、その意をいふことあり

俳諧叢句朗詠集

初編 一冊 一名口調龜鑑

此書の、その意をいふことあり、その意をいふことあり、その意をいふことあり

俳諧合鏡

懷中 一冊

拙堂芦丸翁撰

此書の、その意をいふことあり、その意をいふことあり、その意をいふことあり

俳諧藏書卷之五 二冊

茶靜大人撰
梅今大人校

此書の遺傳... 俳諧の蔵書... 梅今大人校... 茶靜大人撰... 此書の遺傳... 俳諧の蔵書... 梅今大人校... 茶靜大人撰... 此書の遺傳... 俳諧の蔵書... 梅今大人校... 茶靜大人撰...

今人明題集 二冊

双雀芥永壺翁輯

此書の天條の秘は... 雙雀芥永壺翁輯

臨時客應接 一冊

未學先生秘授

此書の先... 臨時客應接... 未學先生秘授... 此書の先... 臨時客應接... 未學先生秘授... 此書の先... 臨時客應接... 未學先生秘授...

勸善忠義傳 二冊

此書人の忠義の流るる義者と云ふその由國史を以て
の成るる事... 忠義を以て... 勸善忠義傳... 二冊

画奉勳功草前集 五冊

山崎知雄大人輯
喜多武清先生画

此書人の古今の英雄豪傑の名譽ありし事... 画奉勳功草前集... 五冊

勳を以て... 勳功草前集... 五冊... 後集の由に別は... 勳功草前集... 五冊

足利家武鑑 十冊

間鐘先生校

此書人の足利將軍家の武鑑... 足利家武鑑... 十冊

繪車之國妖婦傳

上編 五冊
中編 五冊
下編 五冊

合十五冊

此書の高南菊の先生の校中ありて世上に知らるるの
五編の第一の繪中なり 他多を深長と深所の
書あり

抱一先生画譜 一冊

彩色入善本

彫物画系

名家画譜 二冊

魚獺手引種

繪本百物語

梅室家集 二冊

梅室先生自撰の集あり

梅室主人所自撰家集 二冊

勢南菊所 編輯あり

系葉集傳譜系 五冊

双雀庵系葉翁の家集也

日光山誌 五冊

植田孟縉編

更科日記 二冊

廣益諸家人名録 一冊

詩佛 五山 兩先生序

此書の祖傳の傳の如き書家國學の著者あり
此書は家傳の如き書家國學の著者あり
此書は家傳の如き書家國學の著者あり
此書は家傳の如き書家國學の著者あり

富士根元記 一冊

鈴木頂行先生校

此の書は鈴木頂行先生の著書なり
此の書は鈴木頂行先生の著書なり
此の書は鈴木頂行先生の著書なり
此の書は鈴木頂行先生の著書なり

甲冑圖式 一冊

同 著

此書は武林法量二編ニシテ甲冑ノ圖ヲシテカニス

弓箭圖式 一冊

同 著

此書は先生著ハス処ノ武林法量中ノ弓箭ノ一節
此書は先生著ハス処ノ武林法量中ノ弓箭ノ一節
此書は先生著ハス処ノ武林法量中ノ弓箭ノ一節
此書は先生著ハス処ノ武林法量中ノ弓箭ノ一節

單騎要略 五冊

村井昌弘先生編輯

此書ハ甲冑ノ着用故實禪襖衣等付ヤウ頭盛ノ
此書ハ甲冑ノ着用故實禪襖衣等付ヤウ頭盛ノ
此書ハ甲冑ノ着用故實禪襖衣等付ヤウ頭盛ノ
此書ハ甲冑ノ着用故實禪襖衣等付ヤウ頭盛ノ

ニサトシ子ニ携ル冬鎗刀器城ニ至ルニテ其故實ヲ明カニ
シ一騎前ノ要領ヲ盡ヤ武家方ハサラナリ有職ノ學シ
玉フ人ハ必坐右ニ置ヘキノ書ナリ村井先生ハ神武迪精武
學先入等ノ作者ニシテ其名高シ

掌中古刀銘鑿一冊 巨櫛園輯

此書ハ先ニ銘盡數多アリトイヘ凡其ト事替リ當 同前
專兩作一傳ノ次第珍敷作人其外吉野年号打作人又
文中心鑄廣狹帽子箇條匙煮鋸取造リノ様子梵字
并彫物ノ次第鑿定會ノ入札ノ卷ヘヨリ致ニ鍛冶官名作
人位列鍛冶ノ系圖并名寄等ニ至ルマテ委シク辨シ難キハ
圖ヲ出シ疑敷事ハ載ス奇大ノ珍書ナリ

明季遺聞 四冊

清鄒錫山先生著

此書ハ清ノ鄒錫山ノ手輯ニシテ明末季ノ自城ノ乱ヲ倡ヘシ
本末ヨリ清ノ閩廣ヲ平定スル事ニイタル國性爺事實
等ノ書ニ詳ナリ

歷代帝王承統譜

折本紀藩春川先生校閱

此書ハ唐虞以來清道光帝ニ至ルマテ漢土歷代承
統ノ主ヲ系譜ニ作リテ歷史ヲヨムモノニ便リス

草聖彙辨 八冊

清朱迦陵先生摹辨

皇國永根文峯先生校字
漢土ニテ歷代ノ草法ヲ集メテ其書數多アルガ中ニ此編精

善ナルニ如ハナシ我朝兼明親王ノ書ヲモ以編ニオサ出セリ
始ノニ二畫ヨリ三十畫ニ至テ多ク檢字アリ以ヨリテ字ヲ察ム
ベシ第八卷ニ草法母觀ヲ附シタリ草書ヲ學ヒ玉フ君子珍
セズンハアルベカラガル書ナリ

草書前赤壁賦 一冊 天民先生書

以書前赤壁賦詩佛先生ノ書レタルナリ筆法一家風ニテ
激セス勸セス手本トスベキ書ナリ

小學題辭 一冊 龍澤先生書

以書宋朱文公ノ小學題辭龍澤先生ノ書レタルナリ筆
力怒張唐人ノ風アリ

草書千字文 一冊 屋代先生書

以書八輪池屋代先生ノ筆法ヲ見ルベキ刻本ナリ

玄對先生画譜 三冊 玄對公羽筆

以書ハ人物花鳥ノ類ヲ玄對先生ノ画習フ人ノ手本トカシ
タルナリソノ奇絶ナルイ本書ヲ開キテ見玉フベシ

西音發微 二冊 柳圃先生遺教
大槻玄幹先生著

以書和蘭書翻譯ノ時西洋語ニアタル和音唐音ヲ
撰ビ對註ノ仕據ヲ詳カトシ西洋字原考ヲ附シタリ

武器袖鏡 一冊

一冊

泉原先生著

此書ハ多ク武器ヲ図式ニテ示シテ且附言ニ兵士ノ事ニ付精キ考ヘアリ

武器袖鏡後編 一冊

同

著

此書ハ甲半首喉輪ヨリ馬具旗指物等ニ至リスベ武器ノ圖式ナリ

武器袖鏡三編 一冊

同

著

此書ハ現在スル古甲胄五十二種ノ威色ヲ彩色圖ニテアラス甲幣製作便ナラシム

皇和魚譜 二卷

粟本先生纂

此書ハ河魚類凡五十一種ノ図説ヲアゲ卷二ハ河海通在ノ魚類一十三種ノ圖説ヲアゲ卷三ハ海魚ノ類ハ近刻ニ出ス魚類ノ性味ヲ毒ノ辨シガタク混シヤスキモ此書ヲヨミタマハ必明ナルベシ

糸己執記 一冊

羽佐間芝歌先生著

此書ハ醫道ノ人ヲ為ニスルワサト心得ス己ガ為ニスルノ仁道也ト心懸ルガ肝要タルヲ辨シタル書ナリ

老婆心書 二冊

同

先生口訣

此書ハ婦人雜振ヨリ小兒出生無病ニ成長セシムル手當

溫涼調理飲食好惡宜忌等ヲ平假字ニ書シ心得
ヤスカラシム

張氏醫

九七冊

明張路玉著編

言志錄

一冊

佐藤一齋先生著

觀世織部大夫校正
諷本百二十番

寸珍本薄用
同外 近刻

全九冊

近代名家画帖 三帖

